

「うちどく」ってなんでしょう (下)

前号に引き続き、今号のテーマも「うちどく (家読)」です。
 家族の会話が少なくなっているといわれる昨今ですが、
 「うちどく (家読)」は豊かなコミュニケーションを生み出すきっかけにもなります。
 先駆的な取り組み事例を基に、その効果を辰濃先生に具体的に紹介していただきました。

「うちどく」は、家読と書く。家族がそろって本を読むのが家読だ。毎日、夕食やお風呂のあとに家読をする家庭もあれば、同じ本を読んで感想を話し合う家庭もある。

家読運動の推進者、佐川二亮さんの話では茨城県大子町、それに佐賀の伊万里市、青森の板柳町などはこの運動の先駆的な地域だ。福島の大矢祭町、青森の野辺地町、岩手の雫石町、茨城の牛久市、福岡の小郡市、長崎の諫早市などの地域でも運動はひろまっている。

市や町や図書館が、中心になり、あるいは各家庭が「家読」をはじめるとを決め、家族そろって本を読みはじめれば、それでもう十分に家読の仲間だ。

現実には、この運動で、同じ本をみなで読み、感想を語りあう家族がふえてきたそう。家読をきっかけに家族の会話がふえてきたという例もある。親が子に、兄や姉が弟妹に絵本を読み聞かせる家庭もふえている。読んだ本の感想ノートを作る家もあり、家読のために「ノーテレビ、ノーテレビゲーム」の日をきめている家もある。

伊万里市は第一日曜を「家読の日」にきめているが、市立黒川小学校の父母への「アンケート」には、こんな言葉が寄せられているという。

◎寝る前に「お母さん、本を読もう」と子どもたちから声がかかるようになりました。本の力つてすごいと思います。図書館に行く回数も増えました。

◎「息子はこういう本が好きなんだ」ということがわかり、誕生日に送る本が決まりました。

◎「ノーテレビデー」が定着し、静かな時を家族みんなで過ごせました。三人の子に本を読んでやり、本の中にできた花や虫のことを話し合いました。

◎一歳になる妹にお兄ちゃんが動物の本を読んでくれて、とつてもうれしく思っています。妹も本を持ってきて『また読んで』とお兄ちゃんにせがんでいます。

◎私が子に読んで聞かせようとすると、自分が読むといつて最後まで読んで聞かせてくれました。気持ちが入って、上手でした。

子どものころ、たくさんの本を読んだことが、文章力を高めるのにどれほど役立っているかということ私たちは経験で知っている。子どものころ夢中で読んだ本がいま、自分の「生きる糧」になっていることも経験が教えてくれている。子に「本を読む楽しみ」を伝えてやること、それは親の責務だ。

さらに大切なのは、家読が、家族の会話を復活させ、家族の結びつきを強いものにしていくということだ。現代の家族が喪失しつつあるものをよみがえらせてくれる、という貴い役割が家読にはある。

●たつの・かずお
 朝日新聞社入社。ニューヨーク支局長、東京本社社会部次長、編集委員を経て、解説委員。「天声人語」を13年間にわたり執筆。平成6年朝日カルチャーセンター社長を経て、現在著述業。

